



日本語・中国語・朝鮮語における依頼に対する受諾表現の比較研究

著者	全 香蘭
内容記述	筑波大学博士（言語学）学位論文・平成23年3月25日授与（甲第5599号）
発行年	2011
URL	http://hdl.handle.net/2241/113035

氏 名（本籍）	全	香	蘭（中 国）
学 位 の 種 類	博	士（言 語 学）	
学 位 記 番 号	博	甲 第 5599 号	
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科		
学 位 論 文 題 目	日本語・中国語・朝鮮語における依頼に対する受諾表現の比較研究		
主	査	筑波大学教授	山 田 博 志
副	査	筑波大学教授	博士（文学）伊 原 大 策
副	査	筑波大学准教授	Ph. D.（言語学）高 木 智 世
副	査	筑波大学准教授	Ph. D.（人類学）井 出 里 咲 子
副	査	筑波大学准教授	博士（比較社会文化）許 明 子

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は依頼に対する受諾を示す表現（「いいですよ」「わかりました」など）について、どのような状況でどのような表現が用いられるか、その具体的な使用傾向を用例調査とアンケート調査をもとに、日本語、中国語、朝鮮語（本論文では、中国吉林省延辺朝鮮族自治州で使われている言語を指す）を対象に分析したものである。

依頼に対する対応には受諾と拒否（それに加えて、保留）がある。このうち拒否は相手の面子を脅かすものであり、それを和らげるためのさまざまな方策が見られるが、受諾はその点で大きく異なる。しかしながら受諾表現にもそれぞれの言語において使い分けがあり、3言語を通した比較対照を行うことによって言語間に見られる興味深い類似点と相違点が明らかになる。本論文はこの観点から3言語の受諾表現の選択基準について分析を行ったものである。

本論文の構成は次の通りである。

第 1 章 序論

第 2 章 日本語の受諾表現の仕組み

第 3 章 中国語の受諾表現の仕組み

第 4 章 朝鮮語の受諾表現の仕組み

第 5 章 全体のまとめと今後の課題

第 1 章では本論文の研究対象、研究の重要性、研究方法等を提示する。「義務性」や「恩恵授与性」など、分析を行う際の鍵となる概念の説明もここで行われる。「義務性」とは「同じ共同体の構成員がそれぞれ自己の立場に応じて、自分が直面している様々な場面において、その立場にある者として、一定の行動規範に従い、責任をもって為すべき、または、回避すべきと一般にみなされている行為の性質」を指す。

第 2 章は日本語の受諾表現を扱う。対象となる表現は主に「わかった/わかりました」「いいよ/いいですよ」「かしこまりました・承知しました・了解」「もちろん・どうぞ」であり、それらが基本的にはまず「±

義務性」という特徴によって使い分けが決定され（「＋義務性」の場面では「わかった／わかりました」「かしこまりました・承知しました・了解」、「－義務性」の場面では「いいよ／いいですよ」「もちろん」）、さらにその下位の使用条件として、「上下」「親疎」といった「人間関係」や「拒否指向」「アクセス要求」といった「依頼内容」が見られることが明らかになる。

第3章は中国語の受諾表現を扱う。扱う表現は主に「好的(haode)」「好吧(haoba)」「行(xing)」「可以(keyi)」「没问题(meiwenti)・当然(dangran)・一定(yiding)」である。ここでも「±義務性」を軸に分析が行われ（「＋義務性」の場面で「好的(haode)」「好吧(haoba)」「一定(yiding)」,「－義務性」の場面で「行(xing)」「可以(keyi)」「没问题(meiwenti)」）、下位の使用条件として、日本語とは異なり、特に「依頼行為の負担度」が重要な役割を果たしていることが明らかになる。

第4章は朝鮮語の受諾表現の分析である。対象となるのは主に「알겠습니다(al-gess-seubnida)」「알았습니다(al-ass-seubnida)」「그래라(geurae-ra)」「그래자(geurae-ja)」「그래마(geurae-ma)」である。「±義務性」を軸に分析が行われ（「＋義務性」の場面で「알겠습니다(al-gess-seubnida)」「알았습니다(al-ass-seubnida)」,「－義務性」の場面で「그래라(geurae-ra)」「그래자(geurae-ja)」「그래마(geurae-ma)」）、使い分けを決定する下位の補助的な概念として「人間関係」や「行為の志向性」などがあげられる。

なお第2章から第4章のいずれの章においても、規則に従わない一見反例と思われる例の存在が指摘されるが、それらは発話者が一定の効果を狙って使うものであり、そこで生じる語用論的效果についても分析が行われる。たとえば日本語で目上の人からの依頼に対し、「－義務性」の場面で「＋義務性」で使われる表現が用いられる場合があるが、それは目上の人に対する「恩恵授与」を避けるためである。同様の現象は中国語と朝鮮語においても見られる。中国語では友人や目上の人からの「－義務性」の依頼に対して「好的(haode)」を用いることがあるが、それは義務のある行為に見せかけ、丁寧さを表すためである。同様に、朝鮮語においても、本来は「＋義務性」の場面に使われる「알겠습니다(al-gess-seubnida)」を「－義務性」の場面で使うことによって、当該行為への強い責任感を表すことになり、仲間意識を表すことになる。ただしこの種の使用にも一定の制限があり、不適切な相手に用いれば、むしろ皮肉やジョークのニュアンスを与えるようになる。

第5章は全体のまとめと今後の課題を扱った章である。日本語、中国語、朝鮮語を通して「義務性」が受諾表現の使い分けを決定する重要な概念であることは共通しているが、「義務性」の適用範囲と「義務性」を構築する要素については3言語において違いが見られる。たとえば日本語では公的な場面では「義務性」のカバーする範囲が他の2言語より広い反面、私的な場面では狭い。また、「±義務性」の下位の使用条件についても3言語の類似点と相違点がまとめられている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の一番の特徴は、研究対象を受諾表現に設定したことであろう。著者自身も指摘しているように、従来の研究は、ともすれば拒否の表現に重点がおかれがちであった。拒否の表現に、言語的、文化的な違いが、より明確な形で現れると考えられるからである。本論文は日本語、中国語、朝鮮語の比較対照を通して、受諾表現においても3言語間に興味深い類似点と相違点が見られることを明らかにしたもので、その点は高く評価されて良い。また、それぞれの言語内においても、たとえば日本語の「わかった」と「いいよ」の使い分けや各言語に見られる語用論的效果の分析など、随所に興味深い指摘が見られる。さらに著者は先行研究を十分参照しながらも、「義務性」という独自の概念をもとに分析を行い、それが一定の有効性を持つことを示した。これは3言語に卓越した言語能力を持つ著者にして初めて可能になることであろう。

しかし同時に、本論文のそのような特徴が弱点とつながっている場合もないとはいえないようである。ま

ず論文全体を通して中心的な役割を果たす「義務性」の概念は十分確立されているとはいえず、「場面」や「人間関係」など「義務性」を構築するとされる諸概念との関係が必ずしも明確ではない。実際の分析においても、特に中国語や朝鮮語に関しては更に緻密な分析が可能であったと思われる点があり、また第5章の「義務性」を構築する要素に関する分析など、もう少し議論を発展させることができたのではないかとと思われる点もある。さらに、分析のもとになる用例は、話し言葉を中心にするという配慮から主にシナリオから収集されているが、量と質の点で若干の問題がないとはいえないようである。より大規模な用例調査を行うことによって、「場面」や「人間関係」の分析に関して修正が加えられる可能性もあるように思われる。

しかしながら、これらの問題点の多くは、分析対象とする問題の複雑さ、微妙さによるところが大きいと考えるべきであろう。これらの点を将来の課題として、今後さらに研究を深めることを期待したい。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。